

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2003年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院			観光学 研究科	観光学専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名		
	観光学部・教授		安島 博幸 印		
<b>自然・人文の別</b>	自然 ・ ○ 人文		<b>個人・共同の別</b>	個人 ○ ・ 共同 名	
<b>研究課題</b>	レジャースタイルの変遷における社会階層の影響－客船を事例として－				
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	観光学研究科・観光学専攻・後期博士2年		臺 純子 印		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
<b>研究期間</b>	2003 年度				
<b>研究経費</b>	200 千円				

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、19世紀半ばからスタートしたオーシャンライナー（大洋横断定期客船）から現代のクルーズシップまでを事例とし、消費行動の一形態であるレジャースタイルの変遷と社会階層の関わりについて、上層階層のレジャースタイルが、時間経過の中で、どのように下層階層に普及していくのか、という視点で歴史的考察を行い、社会階層による影響と、その構造を分析することを目的とした。

その結果、現代のクルーズシップに多く見られる「オペラハウス型ダイニング」や「高層アトリウム」は、現代の中階層向けに造られており、オーシャンライナー時代の「贅沢」空間への憧れを分かりやすい形で具現化したものと考えられることが分かった。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[[「贅沢」空間 ] [大階段 ] [オペラハウス型ダイニング ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2003 年度の研究計画では、19 世紀半ばからスタートした大洋横断定期客船や現代のクルーズシップを事例として、レジャースタイルの変遷を歴史的に考察し、社会階層による影響と、その構造を分析することを目的とした。特に客船の施設やサービスの変化に焦点を絞り、仮説として

- 1) 19 世紀半ばから始まった観光の大衆化過程で、前時代の上層階層の旅やレジャースタイルが、次の時代の理想モデルとして機能してきた。
- 2) 20 世紀後半に入ると、前時代の理想モデルとは異なる価値観のニューモデルが新興階層によって作られるようになった。
- 3) 旅やレジャーのスタイルの変化には、上流階級にとってタブーであった日焼けがお洒落なこととして受け入れられるようになったように価値観の逆転が大きな影響を与えているが、20 世紀後半に登場したニューモデルにも、何らかの価値観の逆転が影響を与えている。

という 3 点を考えた。

その研究手順として 1) 客船の概略を歴史的に整理する。2) 客船のパブリックスペースの用途の変化を整理する。3) メインダイニングとエントランスホールに着目し、さらにメインダイニングとエントランスホールにおける階段の有無と、ターゲットとしているマーケットとの関連性を分析する。4) 客船のレストランの種類と数の変化などから、サービスの変化を分析する。5) 新しく登場しているサービスとしてインターネットがあるが、その普及状況と過程から、サービスの変化を分析する。6) 全体のまとめを行い、結論とする。という計画を立てた。

以上の仮説・研究手順に基づいて、まず準備段階として、変化を見るための尺度となる「基準点」を定めるために、初期オーシャンライナーの施設やサービスを分析することにした。これを出発点に、その後、オーシャンライナーからクルーズシップへという変化について、何が、どのように変化したかという大きな流れを分析して、歴史軸の「基準線」を構築する。さらに、この「基準点」と「基準線」を骨格にして、さらに「肉付け」することにした。

まず「基準点」の設置のために、世界初のオーシャンライナーと言われるキュナード社のブリタニア号の施設とサービスについて分析した。(これは立教観光学研究紀要 第 6 号/2004 年 3 月発行において、論文「初期オーシャンライナーの施設とサービス」として掲載されたが、本研究の主眼であるオーシャンライナーからクルーズシップへの変化を取り扱っていないため、立教 SFR 助成による研究としていない。)

次に、「基準線」構築のために、オーシャンライナー時代から現代に至るまで事業を継続しているキュナード社のフラッグシップである“クイーン・シスターズ”(クイーンメリー、クイーンエリザベス、クイーンエリザベス 2、クイーンメリー 2) を対象に、施設の変化を分析した。

この分析により、オーシャンライナーからクルーズシップへと変化する中で、客船内の施設の変化には、次の 5 つのパターンがあることが分かった。

- ① トップダウン：個室レストランや大階段のあるメインエントランス、スパ施設などのような 1 等あるいは 2 等船客専用だった施設が、クルーズシップでは普遍化し、誰でも利用できる施設として門戸が開かれたパターン。
- ② ボトムアップ：3 等船客用だった施設が、クルーズシップでは誰でも利用できるようになったパターン。この分析では洗濯・アイロン室しか該当しない。
- ③ 仕立て直し：1 等船客向け施設のうち、紳士を対象としていたスモーキングルームが、クルーズシップではシガーラウンジとして登場した。これは現代の禁煙志向にも関わらず、ファッショナブルなナイトライフの場として「仕立て直され」、その意味を変えることによって登場したパターンと考えられる。
- ④ 退場：1 等船客向け施設のうち、女性を対象としていたドロ잉グループや、手紙やメモを書いたり、あるいは乗船している VIP へのインタビュー撮影をする場として使われることもあったライティングルームは、現代のクルーズシップに取り入れられていない。歴史から「退場」してしまったパターン。
- ⑤ 新登場：アウトドアプールやブッフエ式レストラン、ビジネスセンター、コンピューターセンターなど、オーシャンライナーにはなかった施設が、新しい嗜好、新しいマーケット、新しい技術の登場によって導入されたパターン。

**研究成果の概要 つづき**

さらに客室階層の変化を分析した結果、市場の細分化と中流マーケットの台頭の一方で、高級マーケットへの「さらなる贅沢」が提供されていることが分かった。そして、これらの分析から、大階段は、単に上層階層が門戸を開いたことによって普遍化したのではなく、またアウトドアプールも、単に新しい嗜好によって登場したのではなく、両者とも複合的な要因によって変化したと考えられること。そして大階段は「目に見え」て、他人に「分かりやすい」ため、大衆マーケットの象徴として復活し、アウトドアプールは、「目に見えにくい」新たな階層差を生み出す機能を持ったと結論づけた。

以上の「基準点」と「基準線」の研究を踏まえ、「肉付け」に該当する研究を行なった。客船の中で、船客が一堂に会するメインダイニングや、利用頻度の高いエントランスホールは、他人の目に触れやすい、という点で、階層性を誇示する空間であり、また、それらの施設に併設されることの多い大階段は、その構造自体が、強い階層性をもつと同時に、その大階段を利用する人々の社会的ステータスを顕示する舞台としての機能を持っていると位置づけた。そして、オーシャンライナーからクルーズシップへの変化の中で、特に「贅沢」空間であると考えられるメインダイニングやエントランスホール、あるいはラウンジなどのパブリックルームの空間構造の変化に着目し、その変遷と社会階層の関わりを考察した。さらに客船における大階段の現れ方と合わせて分析を行なった結果、6つの時代に区分できることが分かった。

第1期は、オーシャンライナー草創期である。19世紀半ばに定期航路が開かれたオーシャンライナーにおいては、1等船客用施設も種類が少なく、天井が低い狭い空間であった。快適性もあまり考慮されておらず、ダイニングにおいてもエントランスにおいても大階段は登場しない。

第2期は、オーシャンライナー拡充期である。オペラハウス型2層構造や、平面1層中央部吹き抜けなどの大空間をもつメインダイニングと、広い空間を必要とするY字型の大階段が登場する。ヨーロッパから新大陸への移民がピークを迎える中、船の大型化が進み、それにより客室階層も分化し、1等船客用の施設が豪華になっていった。社会の上層階層が乗る船であるという安心感を与え、移民を集客しやすくするためであったといわれる。

第3期は、オーシャンライナー黄金期である。この時期はすでに1等客のみのクルーズ専用船が登場し始め、こうした船ではシンプルな空間が増えていく。しかし北大西洋航路の船では、平面1層だが、天井高2・3層の大空間と末広I字型大階段を持つメインダイニングが見られ、またスモーキングルームなどのパブリックスペースにもオペラハウス型2層構造やY字型大階段が採用された。第一次世界大戦後、裕福になったアメリカ人を狙って、贅沢な客船が登場したが、アメリカの禁酒法も影響したと考えられる。

第4期は、オーシャンライナーの衰退と第1次クルーズブームの到来である。第二次世界大戦後、オーシャンライナーからクルーズシップへの転用が進み、空間的にはシンプルな構造で、多目的利用、スペースの有効利用が追求された。クルーズブームが本格化する1970年代後半になると、1週間単位のクルーズを想定した専用船が開発されたが、オイルショックの影響もあり、規模の経済性やサービス動線の最適化などが重視された。

第5期は、第2次クルーズブームである。アトリウムを伴ったエントランソロビーが登場し、以降、高層化が進んだ。総合的な市場を狙うクルーズシップが大型化した一方、小型で贅沢なタイプ、帆船などの特殊タイプなど、市場の細分化が進んだ。

第6期は、第3次クルーズブームである。1990年代に入り、さらにクルーズシップの大型が進んだが、それとともに第2期を思わせるオペラハウス型2層構造のメインダイニングや高層アトリウムにY字型大階段が復活した。またこの時期アメリカは、クリントン政権下で経済が好況であった。

以上の分析から、一方では客室階層がない「モノクラス化」が起きていくが、他方では、「差異化」への欲求から市場の細分化が進むという異なる流れが同時に起きていることが分かった。メインダイニングの大階段は、オーシャンライナー時代のように社会的ステータスを顕示するための舞台としてではなく、オーシャンライナーの贅沢なイメージを象徴する意味を持つようになったのであり、また高層アトリウムの大階段は、イベントをエンターテインメント化するための舞台となったと考えられる。さらに贅沢な空間を必要とするオペラハウス型2層構造やY字型階段は、むしろ大衆化の象徴となったと考えられると結論づけた。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文：

著者名：臺 純子

投稿予定論文標題：客船における「贅沢」空間の変遷

雑誌名：観光研究

研究成果の概要に記載した「肉付け」に該当する部分は、日本観光研究学会の機関誌「観光研究」の査読論文としての投稿を目指しており、現在、最終校正を行っている。

④ その他：学会発表

著者・発表者：臺 純子

論文標題：

**CHANGES IN SOCIAL STRATA ON THE CUNARD'S QUEEN SISTERS**

(本文のみで約 5000 ワード)

研究概要に記載した「基準線」に該当する部分の論文は、2004年7月に長崎で開催されるアジア太平洋観光学会 (Asia Pacific Tourism Association) の大会に応募し、査読の結果、発表セッションに参加できることが決定している。論文は、大会論文集 (CD-ROM) に掲載される。